

〈呼びかけ〉の人類学へ向けて

Toward an Anthropology of Calling

一般社団法人日本文化人類学会
第19回学会賞 受賞記念講演

2024年6月15日，北海道大学札幌キャンパス クラーク会館講堂

森山 工（東京大学）

1 古代・近代・枢軸時代

1 古代・近代・枢軸時代

- マルセル・モース「贈与論」より

もともとは、物それ自体が人格と力能を備えていたのに違いない。

物は、ユスティニアヌス法やわたしたちの法が考えるような無機質の存在者ではない。

= 非常に古代的なローマ法を論ずる文脈

- モースの存在論：物は「無機質」でなく「人格と力能」をもつ

⇒ 現代のアニミズム論（フィリップ・デスコラ）

パースペクティヴィズム論（エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ）

岩田慶治

1 古代・近代・枢軸時代

- モース「贈与論」（1925年刊）を同時代の20世紀前半に置く
- レオン・ブランシュヴィック『知性のさまざまな時代』（Léon Brunschvicg, *Les Ages de l'intelligence*, 1934）
- 「知性が理解する世界」（monde intelligible）を構想すること
＝知性にとって超越的なこと
⇒このような想定はプラトンとカントに帰されてきた
- これに対して、リュシアン・レヴィ＝ブリュルが論ずる「未開の心性」（mentalité primitive）

知性が理解する世界についての露骨に現実主義的な描き方と、
未開の心性と呼ばれているもののあいだの比較

1 古代・近代・枢軸時代

- モースの立論：「ユスティニアヌス法（6世紀前半）&西洋近代法」
⇒ 非常に古代的なローマ法（紀元前8世紀半ば）
- ブランシュヴィックの立論：「プラトン&カント」
⇒ 未開の心性（レヴィ＝ブリュル）
- カール・ヤスパースの「枢軸時代」論（1949年）： 世界史・文明史上で紀元前500年頃を想定
⇒ 中国（諸子百家の活動）， インド（ウパニシャッド哲学，仏教，ジャイナ教），
イラン（ゾロアスター教）， パレスティナ（預言者の出現）， ギリシア
（ホメロス，ソクラテス，プラトン，アリストテレス）， など
＝ 反省化に支えられたメタ意識， 精神化， 人間存在の全面的
変革， 人間であることの真の自覚

1 古代・近代・枢軸時代

- 「枢軸時代」より前の思考様式や知性のあり方への関心
- モース「贈与論」序論より：市場の形態について

セム的形態，古代ギリシア的形態，ヘレニズム的形態，ローマ的形態

= 近代的ともいえる諸形態 (les formes, on peut dire modernes)

- 「贈与論」における「近代」の位置づけ
= のちに提起される「枢軸時代」以降を「近代」として把握
- その上で，「枢軸時代」より前のアルカイックな形態を問題とするという立論

1 古代・近代・枢軸時代

- それでは、「枢軸時代」より前の知性のあり方とは？
- 反省化によって意識がメタレベルへと「超越」することのない知性
- アラン・ストラザーン：ヤスパースの「枢軸時代」論を踏まえて、宗教性の二つの存在論的な様態を提起
 - 「内在論」(immanentism)
 - 宗教性の普遍的なあらわれ
 - 人格性 (personhood) の広範な付与 = 「アニミズム」
 - 「超越論」(transcendentalism)
 - 超越的領域と世俗的領域との存在論的断絶
 - 世俗からの解放・救済
 - ⇒ 「内在論」で重視される「ここと今」を超越すること
- マーシャル・サーリンス：ストラザーンを踏まえた「メタパーソン」論

2 「自分の外に出る」 ことと 〈呼びかけ〉

2 「自分の外に出る」ことと〈呼びかけ〉

- モース「贈与論」結論章より

このように、人類進化の端から端まで一貫して、英知の教えは一致している。これまでずっと行動原理であり続けてきたもの、そして、これからもずっとそうであり続けるであろうものが、あるのだ。わたしたちの生活原理としても、だからこの行動原理を取り入れようではないか。自分の外に出ること。つまり与えること。それも、みずから進んでそうするとともに、義務としてそうすること。そうすれば過つ恐れはない。

- 「自分の外に出る」「与える」

⇒ 他者への志向性 = 他者に対してみずからを開くこと

⇒ 他者に対して〈呼びかける〉こと

2 「自分の外に出る」ことと〈呼びかけ〉

- 〈呼びかけ〉(appel) をめぐるジャン＝ポール・サルトルの考察

呼びかけとは、状況のなかにある個人の自由が、状況のなかにある別の個人の自由を承認することである。呼びかけがなされるのは、呼びかけるものが呼びかけられるものに対して提起する働きかけ、すなわち与える働きかけを起点としてである。働きかけは、望まれた目的、構成された目的にしたがってなされる。それは条件づけられた目的であって、何らかの手段を前提とし、その手段に依存した目的である。

- 〈呼びかけ〉は、わたしの自由が他者の自由を承認すること
- ただし、その承認は具体的な「状況」(situation) に捕捉されている

2 「自分の外に出る」ことと〈呼びかけ〉

- サルトルが論ずる〈呼びかけ〉：自由の承認の相互性

わたしの自由が他者の自由を望むとき，他者の自由はわたしの自由を望む。それ以外ではありえない。それというのも，そのときわたしの自由は，他者の自由を自由によって自由に承認することを望むのだからである。

- サルトルが論ずる〈呼びかけ〉：多様性の承認

「多様性」とは＝わたしと他者とがあらかじめ「同一性」に回収されているのではないということ

⇒ いまだ存在していない連帯性と統一性をつくりだすこと

(強調は原文)

2 「自分の外に出る」ことと〈呼びかけ〉

- サルトルの考察から得られる4つの論点
 - 1 〈呼びかけ〉は対他関係における他者の承認である
 - 2 〈呼びかけ〉における他者の承認は、〈呼びかける〉ものと〈呼びかけられる〉もののあいだで相互的になされる
 - 3 〈呼びかけ〉によって自他の連帯性と統一性が形成される、あるいは創造される
 - 4 〈呼びかけ〉において、〈呼びかける〉ものも〈呼びかけられる〉ものも、そのそれぞれが何らかの「状況」に捉えられており、何らかの現実的な条件づけを受けている

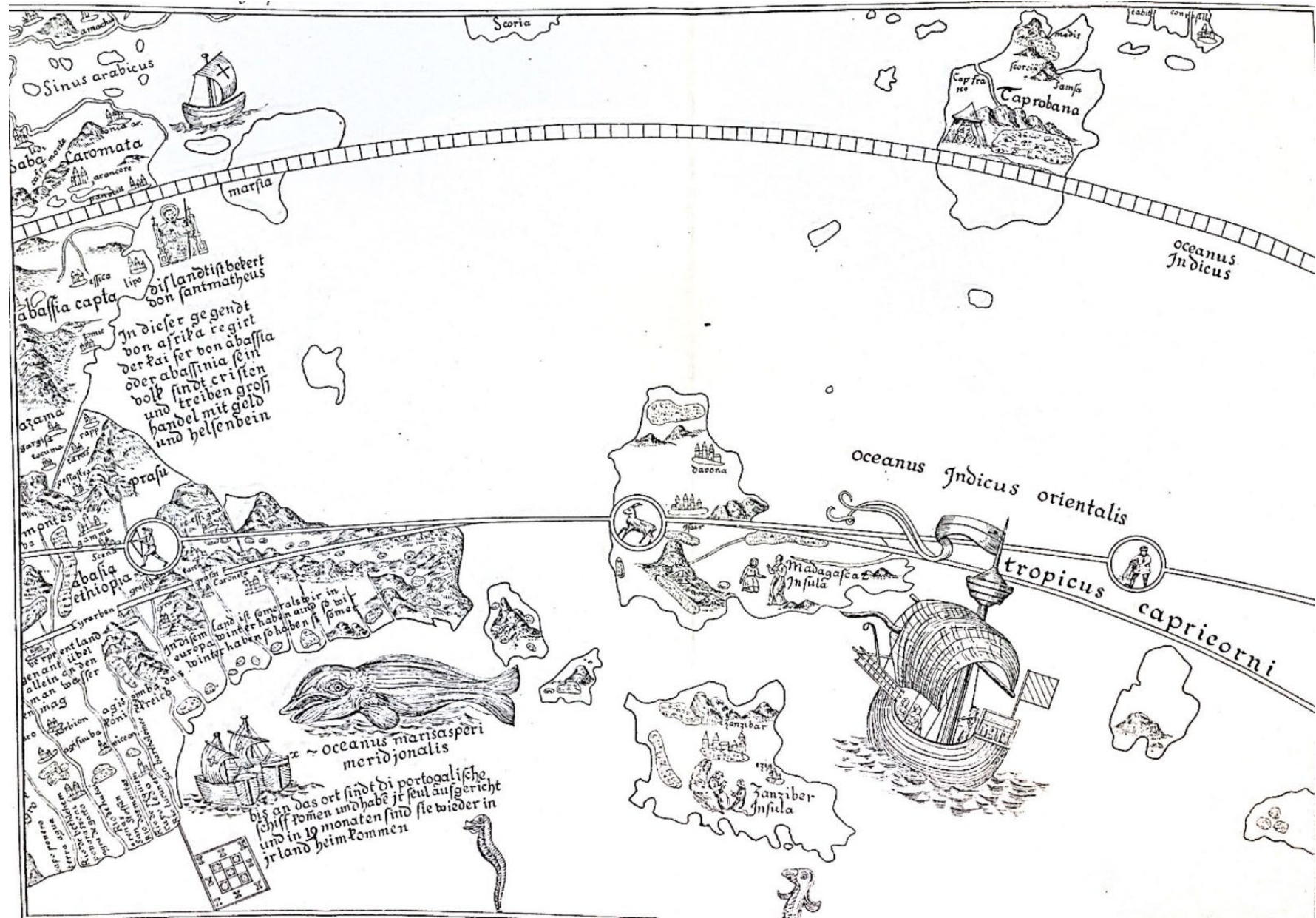
3 〈名づけ〉 と 〈名乗り〉 , そして 〈名指し〉

3 〈名づけ〉と〈名乗り〉，そして〈名指し〉

- 日本の文化人類学における〈名づけ〉と〈名乗り〉の理論
＝内堀基光，名和克郎ら
⇒ 〈名づけ〉と〈名乗り〉の二分法的な理論化
- 〈名づけ〉は，〈名づけられる〉相手が眼前にいなくともなされる
- しかし，その〈名づけ〉が〈名づけられた〉相手とも共有される場合がある
⇒ 〈名前〉による相手への〈呼びかけ〉
＝ 〈名前〉を用いた相手の〈名指し〉
- 〈名前〉を用いた〈名づけ〉(naming)／〈名指し〉(addressing)

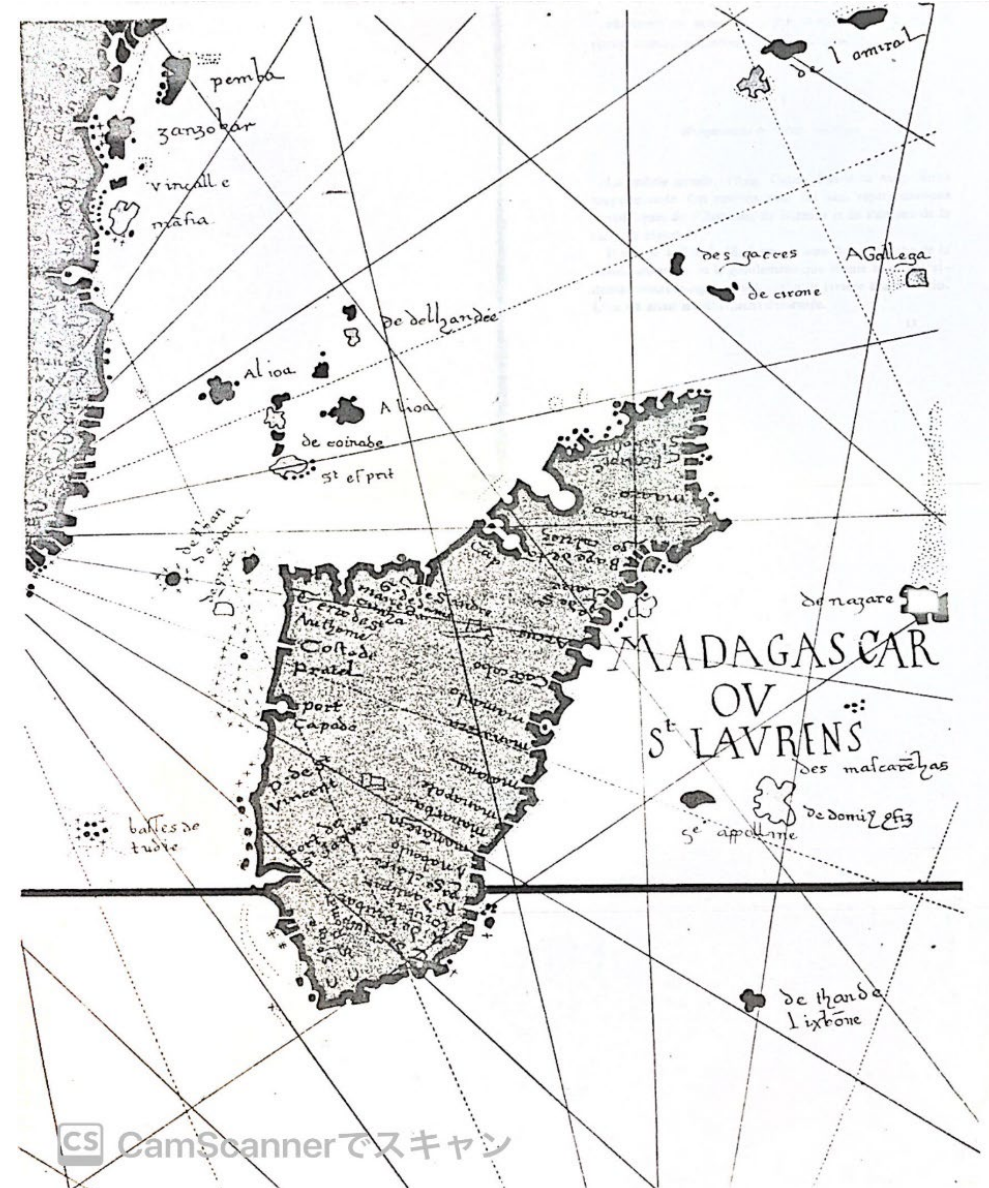
3 〈名づけ〉と〈名乗り〉, そして〈名指し〉

- 「マダガスカル」(Madagascar) という〈名前〉について
- マルコ・ポーロの叙述を端緒として, ヨーロッパにおいて成立・流通
- 当初は, インド洋上にあるべき想像の島として
- 右図: マルティン・ベハイムの世界地図(1492年, 部分)
- “Madagascar Insula”として島が記載される



3 〈名づけ〉と〈名乗り〉，そして〈名指し〉

- 「マダガスカル」(Madagascar) という〈名前〉について
- マルコ・ポーロの叙述を端緒として，ヨーロッパにおいて成立・流通
- 当初は，インド洋上にあるべき想像の島として
- 1500年，ポルトガル人の島への到達
- この島が「マダガスカル」とであるとされる
- 右図：アンリ2世の地図（1542年）
- “Madagascar ou St Laurens” として，地図に島が記載される
- 島や島民とは無縁のところで，ヨーロッパによって「マダガスカル」という〈名前〉が確立



3 〈名づけ〉と〈名乗り〉，そして〈名指し〉

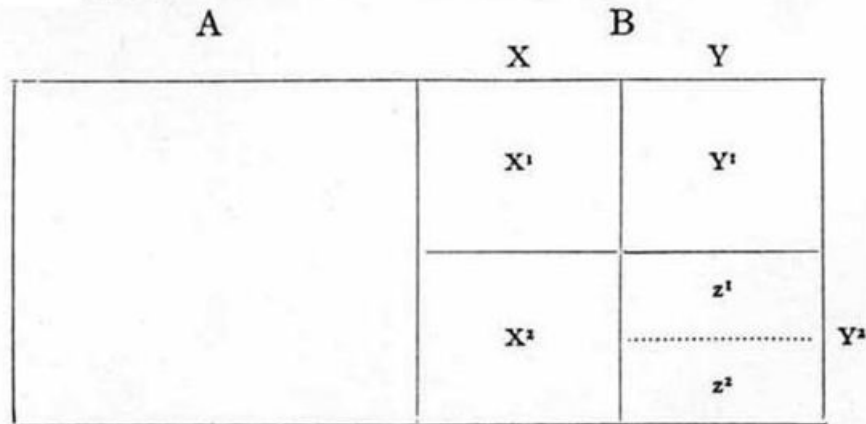
- 19世紀初頭のヨーロッパの政治情勢：ナポレオン戦争の戦後処理
 - ⇒ フランスに抗してイギリスが島への勢力伸長を企図
 - 17世紀半ば以降，フランスが島の東海岸部に拠点形成を図ってきた歴史的経緯
 - フランスを牽制すべく，イギリスは島の内陸部への進出を企図
- その当時，内陸部のメリナ (Merina) 王国の動向
 - ⇒ 王国を統一し，版図の拡大を進める
- 1817年，イギリスはメリナ王とのあいだに友好条約を締結
- イギリスはそこで，メリナ王を「マダガスカル王」(King of Madagascar) と〈名指す〉
 - ⇒ それを受け，メリナ王が「マダガスカル王」を〈名乗る〉

3 〈名づけ〉と〈名乗り〉，そして〈名指し〉

- 〈呼びかけ〉におけるサルトル的な「状況」の拘束性
 - 〈名指した〉イギリスにとっての「状況」
 - 〈名乗った〉メリナ王国にとっての「状況」
- 「内在論」の世界における〈呼びかけ〉
- 〈呼びかける〉ものと〈呼びかけられる〉ものが存在論的に同一の地平にあること
- 〈呼びかける〉ものと〈呼びかけられる〉ものの「状況」以前の〈共同性〉
- 自他の分節，および自他それぞれの「状況」への捕捉以前に，分節化に先立つ未分化な〈共同性〉が措定されていること
 - ⇒ 「内在論」的世界における人格性 (personhood) の措定

3 〈名づけ〉と〈名乗り〉, そして〈名指し〉

- 「内在論」的世界において措定される自他の分節化以前の〈共同性〉
- 闘うことにおいても〈呼びかけ〉がなされ, その前提として未分化な〈共同性〉が措定されること = 人類学で古典的な「分節リネージ体系」のモデル



E. E. Evans-Pritchard, *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*, Oxford: Oxford University Press, 1940, p. 144.

- 19世紀末におけるフランスとメリナ王国との闘い
 - ⇒ フランスによる全土の保護領化を意図した「マダガスカル女王」としての〈名指し〉と, 〈名指し〉を受けたメリナ王国の〈名乗り〉

4 「内在論」と「超越論」

4 「内在論」と「超越論」

- 「内在論」の世界において、〈呼びかけ〉はサルトル的な「状況」への分節化に先立つ未分化な〈共同性〉の措定にもとづく
 - ⇒ 〈呼びかける〉ものと〈呼びかけられる〉ものは同一の存在論的地平に位置する
- 「超越論」の世界は、そのような〈共同性〉の外部から到来する
- 19世紀末マダガスカルにおける植民地化（併合法）の宣告
 - ⇒ その一方的な性格
 - = 現地政府や現地住民との〈共同性〉の不在
- 「内在論」的な〈共同性〉の外部から到来するものとしての「超越論」の世界
- 「外来王」（stranger-king）の到来との類比性

4 「内在論」と「超越論」

- 今後の課題となる論点

- 「内在論」的な〈共同性〉の外部から到来する「超越者」は〈呼びかけ〉をなすのか，どのような〈呼びかけ〉をなすのか
- 「超越論」の世界における〈呼びかけ〉は，〈呼びかけられる〉ものとのあいだにどのような〈共同性〉を措定するのか
- 「内在論」と「超越論」との存在論としての差異
 - ⇒それぞれの世界における〈呼びかけ〉の存在論的な差異

- 今後の検討の見通し

- ルイ・アルチュセールによる〈呼びかけ〉（interpellation）の理論
 - ⇒ 国家が，国家のイデオロギー装置によって，個体に〈呼びかける〉という立論
 - = 存在論的に未分化な〈共同性〉の措定を離れ，それゆえ存在論的に同一の地平に
なく，すでに分化したヒエラルキーに位置づいた存在者からの〈呼びかけ〉
- カイ・アーヘムによるアニミズムの類型論
 - = 平等的・水平的なアニミズムと，階層的・垂直的なアニミズム
 - ⇒ 政治的・社会的なヒエラルキーとの相関性
 - ⇒ ヒエラルキーの有無に対応したアニミズムにおける存在論的な差異

参照文献（欧語文献）

- Althusser, Louis, *Idéologie et appareils idéologiques d'État* (Notes pour une recherche), Louis Althusser, *Positions*, Paris : Éditions sociales, 1976, pp. 79-137.
- Arhem, Kaj, Southeast Asian animism in context, Kaj Arhem & Guido Sprenger, eds., *Animism in Southeast Asia*, with an end comment by Tim Ingold, London & New York : Routledge, 2016, pp. 3-30.
- Brunshvick, Léon, *Les Ages de l'intelligence*, Paris : Librairie Félix Alcan, 1934.
- Chapus, G. S. & G. Mondain, *Rainilaiarivony : un homme d'État malgache*, Paris : Editions Diloutremer, 1953.
- Descola, Philippe, *Par-delà nature et culture*, Paris : Gallimard, 2005.
- Evans-Pritchard, Edward E., *The Nuer : A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*, Oxford : Oxford University Press, 1940.
- Graeber, David & Marshall Sahlins, *On Kings*, Chicago : Hau Books, 2017.
- Grandidier, Alfred, *Histoire de la géographie de Madagascar*, Paris : Librairie Hachette, 1892 [1885].
- Grandidier, Guillaume, L'origine du nom de Madagascar. *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 35^e année, n. 1, 1891, pp. 9-10.
- Gravier, Gabriel, *La Cartographie de Madagascar*, Rouen : E. Cagniard & Paris : Augustin Challamel, 1896.
- Lévy-Bruhl, Lucien, *La mentalité primitive*, 4^e édition, Paris : Librairie Félix Alcan, 1925 [1922].
- Sahlins, Marshall, *The New Science of the Enchanted Universe : An Anthropology of Most of Humanity*, with the assistance of Frederick B. Henry Jr., Princeton and Oxford : Princeton University Press, 2022.
- Sartre, Jean-Paul, *Cahiers pour une morale*, Paris : Gallimard, 1983.
- Sartre, Jean-Paul, *Critique de la raison dialectique*, tome 1, Paris : Gallimard, 1960.
- Sibree, James, *The Great African Island : Chapters on Madagascar*, London : Trübner & Co., 1880.
- Strathern, Alan, *Unearthly Powers : Religious and Political Change in World History*, Cambridge : Cambridge University Press, 2019.

参考文献（邦語文献 ※邦訳文献を含む）

- 岩田慶治『カミの人類学—不思議の場所をめぐって』講談社（講談社文庫），1985年.
- 岩田慶治『草木虫魚の人類学—アニミズムの世界』講談社（講談社学術文庫），1991年.
- ヴィヴェイロス・デ・カストロ，エドゥアルド「内在と恐怖」丹羽充訳『現代思想』2013年1月号，pp. 108-126.
- ヴィヴェイロス・デ・カストロ，エドゥアルド「アメリカ大陸先住民のパーспекティヴィズムと多自然主義」近藤宏訳『現代思想』2016年3月臨時増刊号，pp. 41-79.
- 内堀基光「民族論メモランダム」田辺繁治編『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス』同文館，1989年，pp. 27-48.
- 奥野克巳・清水高志『今日のアニミズム』以文社，2021年.
- グリアスン，フィリップ・ジェイムズ・ハミルトン『沈黙交易—異文化接触の原初的メカニズム序説』中村勝訳，ハーベスト社，1997年.
- サーリンズ，マーシャル『歴史の島々』山本真鳥訳，法政大学出版社，1993年.
- 澤田直『〈呼びかけ〉の経験—サルトルのモラル論』人文書院，2002年.
- 竹本研史『サルトル「特異的普遍」の哲学—個人の実践と全体化の論理』法政大学出版社，2023年.
- 名和克郎「民族論の発展のために—民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』57(3)，1992年，pp. 297-317.
- モース，マルセル「贈与論—アルカイックな社会における交換の形態と理由」マルセル・モース『贈与論 他二篇』森山工訳，岩波書店（岩波文庫），2014年，pp. 51-453.
- 森山工「名前をめぐる運動—マダガスカル植民地前史における名乗りと名指しの抗争」黒田悦子編『民族の運動と指導者たち—歴史のなかの人びと』山川出版社，2002年，pp. 14-31.
- 森山工「フランスのマダガスカル進出（一八八〇年代）」歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗Ⅰ 南アジア・中東・アフリカ』岩波書店，2009年，pp. 300-302.
- ヤスパーズ，カール『歴史の起源と目標』重田英世訳，ヤスパーズ選集IX，理想社，1964年.